

メアリ・ウルストンクラフトは『キャビネット』に寄稿したか?〈後〉

——一七九〇年代イギリスの急進主義・慈善論・非国教徒サークル——

梅 垣 千 尋

三 非国教徒知識人サークルのつながり

——人的結合関係における接点

この節では、表題の疑問にたいして、人的ネットワーク上のつながりという側面から迫っていく。まず、ウルストンクラフトが属したロンドンの「ジョンソン・サークル」、次いで、『キャビネット』の寄稿者たちが属したノリッジの「エンフィールド・サークル」の成り立ちと特徴を明らかにし、その上で、ウルストンクラフトと『キャビネット』との間に接点がありえたかどうかを考察する。具体的には、これら二つのサークルを股にかけた社交上の人脈、政治活動、出版事業という三つの側面に光をあてる。

(一) 「ジョンソン・サークル」

一 (一) で見たように、ウルストンクラフトに著述家としての独立のきっかけを与えたのは、ロンドンの出版者ジョンソンである。彼はペインの『人間の権利』(一七九一—九二年)の出版に奔走するなど、一七九〇年代の急進派の言論活動を支えたことで知られている。だが、彼の活動は、同年代にニューゲイトでの獄中生活を幾度も経験したダニエル・I・イートン (Daniel Isaac Eaton, ?1751—1814)、『ジェレマイア・S・ジョーダン (Jeremiah Samuel Jordan, fl.1790)』、『ジェイムス・リッジウェイ (James Ridgway, fl.1782—1817)』といった「煽動的」な急進派出版者たちのものとは区別されるべきであろう。⁽¹⁾ 事実、彼のキャリアはその数十年前にも遡る。ユニテリアンとして、

六〇年代からジョウジフ・プリーストリ (Joseph Priestley, 1733-1804) ¹⁾、リチャード・ブライス (Richard Price, 1723-91) ²⁾、セオフィラス・リンゼイ (Theophilus Lindsey, 1723-1808) ³⁾、「理性的非国教徒」と呼ばれる知識人たちと交際を深めていたジョンソンは、彼らの神学的・哲学的著作の大部分を出版していた。八〇年代に非国教徒の差別立法撤廃を目的とした協会活動が活発になると、彼はリンゼイが主催する「聖書知識普及協会」の公式出版者になっていく²⁾。出版者としての彼の成功は、こうした非国教徒の政治活動と人脈によるところが極めて大きかった。だが、ロンドンの文化的中心地、セントポール・チャーチャードに書店を構えてから、ジョンソンは宗派を超えた広範な人びとと交友関係をもつことになる。また、有能な出版者であった彼は、非国教徒アカデミーのひとつ、ウォリントン・アカデミーの教師を父にもつアナ・シ・バーボールド (Anna Laetitia Barbauld, 1743-1824) をはじめとする女性の文筆活動を促し、増大しつつある女性読者層を引きつけてもいた³⁾。ある意味で、ジョンソン・サークルには、国教徒の家庭に育ったウルストンクラフトのような女性著述家を受け入れる素地が整っていたと言ってもよい³⁾。

彼女はここで、知識人仲間との親密な交際の機会を手にすることになる。サークルの常連であったスイス人の画家、ヘンリ・フュースリ (Henry Fuseli, 1741-1825) は、おそらく彼女のはじめでの恋愛の対象であり、スコットランド出身で医者ジョージ・フォードイス (George Fordyce, 1736-1802) は、その後、産褥熱による彼女の死に立ち会う医者の一とりとなる。アメリカ人で元陸軍付き牧師のジョエル・バロウ (Joel Barlow, 1754-1812) の妻「レヴュー」の編集者、クリスティの妻レベッカとともに、彼女のごく近い友人であった。

さて、これらの顔ぶれからは、ジョンソン・サークルが、宗派や職業ばかりか、国籍においても多様な人びとから成っていたことがわかるであろう⁵⁾。クリスティの存在に示されるように、ジョンソンは非国教徒の友人を通じて、スコットランドの知識人との間に太いパイプをもっていた⁶⁾。彼が大陸とのつながりを重視していたことも明白である。ウルストンクラフトは彼のもとで、フランス蔵相ネッケルの『宗教的見解の重要性について』や、ドイツの教育家ザルツマンの『子どものための道德要綱』を翻訳しており、

『アナリテイカル・レヴュー』でも、大陸の書物は積極的に紹介されている。フランス革命勃発後の数年間、このサークルから、彼女を含む少なくない人びとが渡仏している点も特筆に値する。⁽⁷⁾ さらにまた、『アナリテイカル・レヴュー』が扱った書物は多岐にわたったため、このサークルには、学際性という特徴も付け加わった。創刊号を見ただけでも、書物の分類には、神学、哲学、書誌学、法学、自然史、植物学、化学、医学、解剖学、数学諸科学、詩、演劇、音楽、農学、絵画などの項目が並ぶ。博覧的とも言えるこうした書評雑誌の出版作業を通じて、ジョンソンは、さまざまに異なる分野の専門家や知識人同士のネットワーク形成と知的交流とを促すことになった。

とはいえ、サークル内のこうした多様性は、階層的に異質な文化的背景をもつ者をも迎え入れるような開放性を必ずしも意味しなかった。もちろんジョンソン・サークルには、職人文化のもとで育ったペインや、最下層職人の家庭に生まれた版画家のウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) といった者たちの姿を見出すこともできる。だが、後者はこのサークルとの間に一定の距離を感じていたし、⁽⁸⁾ 前者にしても、前述のパーボールドの弟で『ア

ナリテイカル・レヴュー』の書評執筆者であったジョン・エイキン (John Aikin, 1747-1822) から、「彼はジェントルマンらしくなく、その会話もあまり感じの良いものではない」と否定的に評されている。ペインの代わりにエイキンは称賛したのは、鋭敏な論理展開でパーク反駁の書『フランスの擁護』を著したことで知られるスコットランド出身の医学者、ジェームス・マッキントッシュ (James MacKintosh, 1765-1832) であった。⁽⁹⁾ この例からもうかがえるように、もっぱらジョンソン・サークルで望ましいものとされたのは、洗練された趣味と磨かれた会話、知識の豊富さと議論の鋭さであったろう。ここでは、九〇年代の急進主義的大衆運動を担った職人階層中心のロンドン通信協会 (LCS) などとは、質的に異なる社交のあり方が求められていたと言ってよい。こうした特徴を見ると、ジョンソン・サークルを、急進主義における「ジェントルマン的な」ウィッグ系の流れに位置づけるべきとする指摘は、⁽¹⁰⁾ 的を射たものであるように思われる。では、もうひとつの「ジェントルマンたちのソサエティ」である、『キャビネット』を取り巻く人びとの集まりはどのようなものであったのか。

(二) 「エンフィールド・サークル」

一 (三) で述べた通り、『キャビネット』の中心メンバーは、マーシュやノーゲートといった、二〇代前半の非国教徒の若者たちであった。彼らを雑誌編集に導く上で、とりわけ大きな役割を果たしたのは、さらに上の世代に属する非国教徒の文人、ウィリアム・エンフィールド(William Enfield, 1741-97)である。エンフィールドは、ウォリントン・アカデミーで文学の教師を務めた後、プライスの甥であるジョージ・C・モーガンの後任として、八五年にノリッジのオクタゴン・チャペルの牧師となった人物である。⁽¹²⁾ 名譽革命百周年を記念して、八八年十一月五日にノリッジで行った説教の中で、エンフィールドは、プライスやブリストリと同様、自由な精神の拡大とともに宗教的寛容の時代が訪れることを説いている。⁽¹³⁾ 実際、彼は国教徒やカトリックとの交流に熱心で、九〇年には文人のウィリアム・テイラー(William Taylor, 1765-1836)とともに、宗派を問わない討論クラブ、「スペキュレイトヴ・ソサエティ」の試みを開始している。カトリックのピッチフォードと独立派のヤングマンは、このソサエティを通じて、オクタゴン・チャペルの会衆であったマーシュと出会

うことになる。⁽¹⁴⁾

『キャビネット』の母体となったのは、このように自由な議論の場を重視したエンフィールド・サークルにはかならない。討論クラブでの活動を通じて意気投合したピッチフォードとマーシュは、九二年ごろにはより若い世代からなる「トウスクラム・ソサエティ」を結成する。⁽¹⁵⁾ キケロの『トウスクラム叢談』に由来するその名称が示す通り、この協会のメンバーは、古典古代の共和制を理想とする点に思想上の共通基盤を見出していた。ここで討論のテーマになったのは、たとえば「フランス共和国の政体はギリシャやローマのそれよりも優れているか、劣っているか?」といった、多分に原理的な問題である。⁽¹⁶⁾ 彼らはフランス革命を支持し、国内の諸改革を志向したが、その関心は具体的な政治運動というよりむしろ、政治問題の起源や本質に関する抽象的な議論に向けられていた。九四年秋になると、彼らは雑誌の出版によってさらに言論空間を拡げるべく、『キャビネット』を創刊する。「序言」によれば、その動機となったのは、直接的にはピット内閣が進める言論弾圧と、対仏戦争の長期化であった。⁽¹⁷⁾ 自由な言論活動のもつ可能性を信じ、フランス革命の原理を信奉した彼らが、国内の政

治情勢に深い懸念を抱いたことは想像に難くない。この雑誌のタイトルには、正しい政治原理を提示する点では、自分たちこそ無原則な現内閣(カビネット)に取って代わりうるという自負が込められていたのかもしれない。

事実、出版にあたった中心人物たちが、この雑誌を、「知識の普及」や「議論の力」による漸次的社会改革の流れに位置づけようとしたことは間違いなかった。『キャビネット』は、その「知識」を「できる限り有用なものにする」ために、政治原理に関する議論以外にも、文学作品や文芸評論を積極的に取り上げると明言している。⁽¹⁸⁾ また、大陸にたいする関心も顕著である。ドイツ文学に造詣の深かったW・テイラーは、シラーやグライムの詩を紹介、翻訳し、フランス語からは、エルヴェシウスの著作や革命中の雑誌の翻訳が掲載されている。一層の知識の拡充を求めるこうした流れの中で、さらに『キャビネット』は、共通の文化的背景をもつ読者たちを寄稿者としても招き入れるようになる。当時ロンドンにいたノーゲートのほか、やや上の世代のオクタゴン・チャペルの会衆であったエドワード・リグビー (Edward Rigby, 1747-1821) やJ・テイラーといった都市の有力者、パティンソンやロビンソンと

いった若き非国教徒、アルダーソンやブランプトル姉妹 (Anne Plumtre, b.1760; Annabella Plumtre, ?1761-1838) ⁽²⁰⁾ といった女性詩人たちの参加は、この雑誌を取り巻く人脈の広がりをよく示している。

さて、こうして見ると、ジョンソン・サークルとエンフィールド・サークルの間には、その成り立ちや特徴において、いくつかの共通点が指摘できるであろう。第一は、そのサークル形成において、非国教徒の人的結合を軸としながら、より多様で開かれた社交のあり方を目指した点、⁽²⁰⁾ 第二は、雑誌という出版メディアと対面での討論の場を通じて、一定の共通文化にもとづいた言説上のコミュニケーションをつくりあげた点、⁽²¹⁾ 第三は、既存体制にたいする批判的姿勢をもちながら、集団的大衆行動と直結する急進主義運動とは明白に一線を画した点である。⁽²²⁾ では、こうした共通の特徴をもつ二つのサークルが交差する余地はあったのであろうか。次に、双方をつなぎえた人物について具体的に考えてみたい。

(二) 二つのサークルを結ぶ人脈

ウルストンクラフトと親交を結んだ著述家のうちで、ロ

ンドンとノリッジの両サークルをまたぐ交友関係をもった者は意外に多い。何よりも、夫となるゴドウィンはイースト・アングリアの出身であり、九〇年代には少なくとも二回ノリッジへ赴いている⁽²³⁾。一度目は、『政治的正義』(初版は一七九三年)を出版してまもなく名声を博した後の九四年六月から七月にかけての時期であり、彼はこのとき、マーシュ、ピッチフォード、J・テイラー、アルダーソンの父親であるJ・アルダーソン (James Alderson, d. 1805)らと会っている。九六年六月には、A・アルダーソンやプランプトルら『キャビネット』の女性執筆者陣の招きで、急進的政治活動の指導者、ジョン・セルウォール (John Thelwall, 1764-1834)とともにノリッジに滞在し、九五年秋の反弾圧立法運動での路線対立によって深まった、彼との溝を埋めている⁽²⁴⁾。だがしかし、ゴドウィンがウルストンクラフトと再会してパートナー関係を結ぶのは九六年春からであり、その時点で『キャビネット』はすでに廃刊されていた。したがって、ゴドウィンがウルストンクラフトと『キャビネット』を結びつけた人物であったとはどうしても考えにくい。

A・アルダーソンも同じく、両サークルと何らかの関わ

りをもち、かつ、ウルストンクラフトと接触のあった人物である。彼女は『キャビネット』寄稿以前から小説や戯曲を書いていたが、九〇年代半ばからは本格的に劇作家を志し、ロンドンのゴドウィンのもとを訪れて、その友人の劇作家、トマス・ホールクロフト (Thomas Holcroft, 1745-1809) や女優のエリザベス・インチボールド (Elizabeth Inchbald, 1753-1821) と交流を深めていた。女性著述家を目指したアルダーソンにとって、『女性の権利の擁護』の著者であるウルストンクラフトは敬愛の対象であり、ゴドウィンの紹介で知り合ってから、彼女が死ぬまで変わらぬ親交を結んでいる。しかし、アルダーソンの場合も、ウルストンクラフトと出会うのは九六年に入ってからのことである。コーフィールドは、この二人が『キャビネット』創刊時から友人であったかのような書き方をしている⁽²⁵⁾が、それは事実とはやや異なる。

むしろ、ウルストンクラフトと『キャビネット』を結びつける役割を果たした可能性がより高いと思われるのは、エンフィールドとノーゲートである。エンフィールドは、ウォリントン時代からジョンソンを知っており、彼のもとで七〇年代からほぼ一年に一冊のペースで説教集や教育書

を出版していた。ノリッジに移ってからも、ジョンソン・サークルとの交流は続いており、彼は『アナリテイカル・レヴュー』の主要な書評執筆者のひとりでもあった。ウルストンクラフトは、八〇年代後半には間違いなくエンフィールドの存在を知っていた。『女性読本』を編む際、彼女がそのモデルにしたのは、非国教徒アカデミーの生徒に「ジェントルマン」としての素養を身につけさせるためにエンフィールドが手がけた名文精選集『スピーカー』(二七七年)であった。⁽²⁶⁾ また、一方のエンフィールドも、ウルストンクラフトの存在は知っており、そればかりか、かなり高く彼女を評価していた。彼は、ラルフ・グリフィスの主催する書評雑誌『マンズリー・レヴュー』に、『女性の権利の擁護』への極めて好意的な書評を寄せている。エンフィールドによれば、ウルストンクラフトは「哲学者」という名に値する女性であって、「現代の女性たちは日々、精神には性の違いが存在しないという疑いの余地のない確証をわれわれに与えている」。エンフィールドの賞賛ぶりは、彼がウルストンクラフトの議論に刺激を受けて、次のような見方を示している点でも際立っている。すなわち、「男性と女性は、疑いなく自らをまずもって人間 *man beings*

man beings とみなすべき」であるが、英語には「ギリシャ語の *Andros* やラテン語の *Homo* のような、人類を意味する何らかの一般用語」が存在しない。これこそ、「われわれの言語の実態的欠陥」をなしている、と。⁽²⁷⁾ 『キャビネット』への寄稿にあたって、エンフィールドが用いた筆名のうちのひとつは、ほかならぬこの「*Homo*」であった。⁽²⁸⁾

ノーゲートの場合も、ほぼエンフィールドと同様なかたちでウルストンクラフトとの関係が指摘できる。文学を糧にすることを決意して九三年にリンカーンズ・インを中途退学した彼は、すでにノリッジで親交のあったエンフィールドの誘いで、『アナリテイカル・レヴュー』の書評者になっていた。⁽²⁹⁾ ロンドンにいた彼をウルストンクラフトが知っていたことを裏づける確証はないが、エンフィールドと同様、ノーゲートが『女性の権利の擁護』を高く評価していたことは間違いない。彼は『キャビネット』に「女性の権利について」と題された二部にわたる論文を書き、ウルストンクラフトの著作を褒め称えるばかりか、彼女の議論をなおも先へと進めている。彼によれば、ウルストンクラフトが「笑いを招くかもしれない」という前置きとも

に控えめに提示した、女性の政治的代表権を求める主張は、より強く打ち出されなければならない。女性は、法的にも政治的にも男性と同じ扱いを受けるべきであり、「われわれは女性大法官、市参事、女性、会員、*alderwomen*、女性主教の席をもつべきなのである」⁽³¹⁾。この言葉は、実際に市参事会員の父をもつノーゲートから発せられると、にわかに具体性を帯びて聞こえてくる。

さらに、ジョンソン自身の『キャビネット』との深い関わりも注目値する。彼は、九五年にはジョーダンとともにロンドンでこの雑誌の販売を請け負っており、エンフィールドの著作のほかにも、同じくこの雑誌への寄稿者であったリグビーの医学書や、W・テイラーによるドイツ・ロマン派の詩の翻訳を出版していた。⁽³²⁾ また、彼の出版サークルの特徴にも、見逃せない点が多い。そこでは、著者と読者の間の垣根が決して高くはなく、しばしば自らも著者であった読者が、興味を抱いた本の著者に気軽に会いに行つて議論を交わすこともあった。⁽³³⁾ 同じ社交の場を共有する限り、出身地や教育経験の違いによって出版メディアから隔てられることはあまりなく、雑誌の寄稿記事は、友人関係や単なる知人関係をもとに、かなり臨機応変に依頼

されていたようである。こうした社交や出版活動のあり方を考慮すれば、ウルストンクラフトがジョンソンのもとにいる際、偶然エンフィールド・サークルのメンバーの誰かと面識をもったこと、そして、彼女がその人物から何らかのかたちで『キャビネット』への寄稿を依頼されたことは、いずれも決して想定不可能な事柄ではないように思われる。

(四) 「大逆罪裁判」の支援寄付金活動

以上では、ウルストンクラフトと『キャビネット』とを結ぶ人脈の存在を確認した。その上で改めて問われなければならないのは、ジョンソン・サークルとエンフィールド・サークルの結びつきが、九五年という時期にいかにか成り立ちえたのかという問題であろう。そこで次に、両サークルを取り巻く九五年当時の政治情勢の動きを辿り、その情勢に呼応して両者のつながりがいかに強まりえたのか考察してみたい。

さて、LCSの結成といった急進派の動きを警戒したピット内閣が、煽情文書取締勅令を出したのは九二年五月であったが、翌年以降、政府の弾圧はさらに強化されていった。スコットランドでは九三年八月から九月にかけて、

「人民の友」協会の創始者のひとりであるトマス・ミュア (Thomas Muir, 1765-98) とユニテリアンのトマス・F・パーマー (Thomas Fyshe Palmer, 1747-1802) が大逆罪の有罪判決を受け、ボタニー湾への流刑を宣告された。パーマーがケンブリッジのフェロー職にあったことからわかるように、彼らは「ジェントルマン」という名にふさわしい社会的地位にあったため、彼らにたいする死刑にも等しい判決は、とりわけスコットランドと関係の深かったイングランドの非国教徒には大きな衝撃であったに違いない。さらに、同年十二月にエディンバラで行われた「ブリティッシュ・コンヴェンション」では、LCSのジョウジフ・ジェラルド (Joseph Gerrald, 1763-96) やモーリス・マーガロット (Maurice Margarot, 1745-1815) らが「相次ぐ「殉教者」となって投獄される。九四年になると、この弾圧体制はイングランドでも本格化し、五月には人身保護法の適用停止に伴って、LCSや国制情報協会 (SCI) のメンバーであったトマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1752-1832) 、ジョン・H・トゥック (John Horne Tooke, 1736-1812) 、セルウォール、ホールククロフトラが、証拠不十分なまま大逆罪の容疑で逮捕された。

『キャビネット』が創刊された九四年秋は、ハーディらの裁判がまさに始まろうとしていた時期である。その「序言」によれば、イングランドが直面しているのは、「フランスがかつて知ったものよりも計り知れぬほど致命的な恐怖体制」であるという⁽³⁵⁾。フランス滞在中のウルストンクラフトもまた、このピット体制下のイングランドに「恐怖にも達するほどの嫌悪感」を抱いていると述べていたことをここで付記しておこう。⁽³⁶⁾この時期の急進派にとって、ピットの言論抑圧は疑いなく「恐怖政治」という名にも値する脅威となっていた。

しかし、この九四年の裁判は、法廷弁護人トマス・アースキン (Thomas Erskine, 1750-1823) の活躍や、ゴドウィンによる裁判長エアへの反論文書の出版といった強力な援護を受け、容疑者全員の無罪釈放判決とともに終結する。この一連の出来事が、改革派陣営の目に、ピットの弾圧体制にたいする自らの勝利として映ったとしても何ら不思議ではない。ハーディの釈放が決まった十一月五日は、今や名譽革命と重ねて記念すべき日と寿がれ、九五年二月四日には、スタンホープ伯爵 (3rd Earl of Stanhope, 1753-1816) を含む一二〇名もの「品行方正な市民」が、

SC Iの本拠地「クラウン・アンド・アンカー」での祝賀会に集まった。⁽³⁷⁾一人当たり七シリング六ペンスの会費を払える彼らを横目に、疎外感を深めたトマス・スペンス(Thomas Spence, 1750-1814)のような下層の急進派の存在を見過すことはできないが、⁽³⁸⁾ともあれ九五年前半は、改革主義的信条をもつ多くの人びとが、反ピットという共通のスローガンを掲げて急進的な運動に合流することのできた時期であったと言える。フランス革命の実態に幻滅を覚えていた急進派知識人たちは、再び社会変革の希望を取り戻した。そして、こうした「連帯」の大きな成果と言えるのが、九五三年三月に始まった大逆罪裁判の支援寄付活動である。⁽³⁹⁾

この活動の目的は、大逆罪の裁判費用、および逮捕された活動家やその家族の援助費用を賄うための寄付金集めであった。三月二十三日にウィッグ系の新聞『モーニング・クロニクル』に掲載された広告文は、「自由という大義」に共鳴する「ブリテン国民の気前の良さ」に訴えて寄付を呼びかけている。不当な逮捕に屈せず自由を守るという主張を打ち出す点で、この活動には一定の政治性があったが、興味深いことに、その活動形態を見ると、モデルとなって

いたのは明らかに任意団体による慈善活動である。⁽⁴⁰⁾委員会(正式名称は「大逆罪の政治犯裁判における被告人の費用を負担する寄付者の委員会」)は、任意による寄付者の名前とそれぞれの金額を記したリストを作成し、さらなる寄付の呼びかけも兼ねて、それを定期的な「モーニング・クロニクル」へ掲載した。ここで注意を引くのは、委員会が自らを「ジェントルマン」と名乗り、実にその委員の半分(41)以上が「エスクワイア」の肩書きをつけていた点である。寄付金は三ヶ月にも満たないうちに、総額一六三五ポンド一六シリングにも及んでいる。

さて、この活動が本稿の目的にとって重要な意味をもつのは、その中心的な担い手が、先に述べたジョンソン・サークルとエンフィールド・サークル双方のメンバーと重なり合うからである。事実、呼びかけ広告を見ると、この寄付金の受領先には、ジョンソンの自宅兼書店が筆頭に記載されており、『キャビネット』の出版元、マーチの名前も並んでいる。寄付者名にはイニシャルや筆名が混ざっているため、実際の寄付者をはっきりと特定することはできないが、限られた情報からでも、リストの中には、本稿にこれまで登場した人物、たとえば、J・テイラー、エイキ

ン、リグビー、そして、バーボールドの夫であるロッシュモント・バーボールド (Rochemont Barbauld, 1749-1808)、ノーゲートの父親であるエリアス・ノーゲート (Elias Norgate, 1727-1803) の名前が確認できる。委員に W・テイラー、P・マーティノー、J・マーティノーが名前を連ねている点からも、ノリッジとの関係の深さがうかがえよう。寄付者リストには、「ノリッジからの正義の友」や「ノリッジ自由探究協会」といった団体名も見出せる。実際にこの活動を担っていたのは、明らかに非国教徒を中心とするグループであったが、中でも大きな役割を果たしていたのは、ノリッジと地理的にも近いケンブリッジのユニテリアンたちであった。委員会に名を連ねたジェントルマンのうち、特にここで名前をあげておきたいのは、九三年に反戦パンフレットを書いたことでケンブリッジのフェロー職を追われていたウィリアム・フレンド (William Friend, 1757-1841)、そして、同じくケンブリッジ、その後ウオリントン・アカデミーで古典を教え、論争家としても有名だったギルバート・ウエイクフィールド (Gilbert Wakefield, 1756-1801) である。⁽⁴⁴⁾ 彼らと交友関係のあったケンブリッジ出身のジェームス・ロッシュ (James

Loth, 1763-1833) と、その後、プリーストリの著作集を出すことになるジョン・T・ラット (John Towell Rutt, 1760-1841) の名前にも注意を配っておこう。⁽⁴⁵⁾ ジョン・サークルとエンフィールド・サークルが、そのネットワーク形成において非国教徒の人的結合を核にしていたことを想起すれば、両サークルが、この寄付金活動をきっかけに共通の政治目標を確認し、より結びつきを深めたことは十分に考えられる。

さらに本稿の目的からして見過ごすことができないのは、この寄付金活動が行われた九五年三月から六月という時期である。前述したように、ウルストンクラフトがフランスから帰国するのは九五年四月、北欧旅行のためにイングラッド北部のハルへと向かうのは六月である。つまり、その間にあたる彼女のロンドン滞在は、ちょうどこの大逆罪裁判支援活動が活発に展開されていた期間と重なっている。帰国直後の彼女の活動に関しては、ゴドウィンの感傷的な記述に引きずられるかのようにして、⁽⁴⁶⁾ これまで多くの伝記作家が私生活上の不幸のみを語ってきたが、彼女が常に自己を「公的」問題にコミットしうる存在とみなしていたことは、忘れられるべきではなからう。いかに個人的問題で

大きな困難を抱えていたとしても、彼女が著述家としての社会生活を送ったことに変わりはなかった。フランスで知り合ったアイルランド人の友人、アーチバルト・H・ローワン (Archibald Hamilton Rowan, 1751-1834) への手紙に書いているように、ロンドン滞在中の彼女の確実な連絡先は、依然としてジョンソン宅であった。⁽⁴⁷⁾この間、彼女がジョンソンの書店に出入りしていたことが疑いない以上、彼女は自由な言論活動を守ろうとするこの寄付金活動の存在を、少なくとも知っていたはずである。そうであるとすれば、ジョンソンのもとで、寄付金活動にたずさわっていたエンフィールド・サークル関係者の誰かと知り合った可能性も決して考えられないことではない。

(五) 詩集出版の支援活動

ロンドン滞在中のウルストンクラフトと、この大逆罪裁判支援寄付金活動の担い手たちとのつながりは、さらにまた別の面から指摘できる。一見したところ、この活動とは全く無関係にも思える資金活動、すなわち、彼女の友人であったアン・B・クリスタル (Ann Batten Christall, b. 1769) の詩集出版資金の募集活動がそれである。クリスタ

ルは、画家であった兄、ジョシュア・クリスタル (Joshua Christall, 1767-1847) とともに、ウルストンクラフトが無名のころから家族ぐるみで交際していた女性である。⁽⁴⁸⁾後に女性作家となるアルダーソンやメアリ・ヘイズ (Mary Hays, 1760-1843) への手紙からも明らかのように、ウルストンクラフトは著述家としての独立を自分以外の女性にたいしても強く勧めていたが、クリスタルもその例外ではなかった。彼女の詩を集めた『小品詩集』は、おそらくウルストンクラフトの支援を受けて、九五年にジョンソンのもとから予約購読金を募って出版されることになる。フランスから帰国したばかりのウルストンクラフトは、妹のエヴェリーナとともに、この詩集の予約購読者リストに名を連ねている。⁽⁴⁹⁾

この資金集めは広範に呼びかけられ、九五年四月一日には、『モーニング・クロニクル』に広告記事が掲載された。⁽⁵⁰⁾興味深いのは、その数日前、同じ新聞の同じ広告欄に、ほかならぬ大逆罪裁判支援寄付委員会の最初の呼びかけ文が掲載されていたことである。詩集の予約購読金の受領先は、もちろん出版者であるジョンソンの書店であったから、この資金は、大逆罪裁判支援の寄付金とはほぼ同じ時期に同じ

場所を集められたことになる。事実、双方のリストに重複して現れる人物名は驚くほど多い。裁判支援寄付金の委員となっていたフレンド、ウエイクフィールド、ロッシェ、ラットのほか、彼らに共鳴して寄付金活動に協力した人物すなわち、エイキン、イートン、非国教徒のペトロンの存在だったトマス・B・ホルス (Thomas Brand Hollis, 1719-1805)、『フレンドの友人で『アナリテイカル・レビュー』の書評執筆者であったジョージ・ダイヤー (George Dyer, 1755-1841)』らは、皆こぞってクリスタルの詩集の予約購読者になっている。また、詩集の購読者リストには、A・L・バーボールド、ジョン・ディズニー (John Disney, 1746-1816)、『カペル・ロフト (Capel Loft, 1751-1824)』といった名前があるが、明らかにここからは非国教徒の人脈を通じた支援のあり方が透けて見える。当時すでに『キャビネット』に寄稿していたアルダーソンも、この詩集の予約購読者のひとりであった。もちろん多分に偶然的要素があったとはいえ、これらの事実は、大逆罪裁判の被告人支援とクリスタルの詩集の出版支援とが似通った人脈によって担われていたことを指し示している。弾圧体制から一時的に解放され、抑圧的な政府にたいする

批判の気運が高まった九五年前半という時期にあって、非国教徒を中心とする人的ネットワークが緊密化していたことは十分に想像されよう。九五年の時点で、ウルストンクラフトと『キャビネット』サークルの双方が位置していたのは、活発な動きを見せたこの一大集団の枠内であった。このような状況を考えれば、ウルストンクラフトのドン滞在中、彼女と『キャビネット』との間の距離はより縮まっていたと見ることができよう。『キャビネット』に寄せられたL. R. の論文は、それが収録版の最後を締めくくる「告別の辞」の直前に位置づけられていることから見ても、九五年一〇月以前に書かれたものであることがわかる⁽⁵²⁾。この論文が、もしも九五年四月以降に掲載されたものならば、それを、彼女と『キャビネット』関係者との交流の成果として見ることに、それほど無理があるとは思われない。さらに言えば、L. R. の論文のテーマが「慈善」であることも、九五年における非国教徒サークルの関心の方向性を考えれば納得がいくであろう。周知のように、九五年は大飢饉の年であり、イギリス各地で食料暴動が相次いだ。貧民の不満の増大は、ピット政府ばかりか、「品行方正な」改革派である非国教徒知識人にとっても脅威に

映ったはずである。大逆罪裁判支援の寄付金を募る呼びかけ文は、六月一七日を最後に『モーニング・クロニクル』から姿を消す。それに取って代わるかのようにして、五日後の紙面に掲載されたのは、LCSによる「無制限な」野外集会の広告であった。⁽⁵³⁾ セント・ジョージス・フィールドで二十九日に開催された集会は、予想をはるかに上回る膨大な数の参加者を集めて、「普通選挙と年次議会」の要求決議を採択した。⁽⁵⁴⁾ 非国教徒サークルのジェントルマンたちが、こうした言わば有象無象の民衆との「連帯」を志向しえたかどうかは、実のところ疑わしい。彼らを選んだのは、直接的な民衆動員型の政治活動よりむしろ、貧民救済という問題をその方法や制度の面から原理的に考察することであつたろう。もし仮にウルストンクラフトがL.R.であったとすれば、彼女はこうした非国教徒サークルの問題意識に沿うかたちで、「公的慈善」を議論の対象としたのではなかろうか。

おわりに

本稿は、可能な限りの史料を用いて表題に掲げた疑問に迫ってきた。二と三で試みたように、テクスト上の共通点

と人的結合関係上の接点に関しては、ウルストンクラフトが『キャビネット』に寄稿しえた可能性を、おぼろげながら示すことができたのではないかと思われる。しかしながら、本稿を結ぶにあたり認めなければならないのは、これらが依然として状況証拠にとどまり、ウルストンクラフトの寄稿を裏づける決定的証拠になりにくいことである。個々の点についていくつかの仮説を立てることは可能であっても、それらを立証するだけの材料が本稿で示されたとは言い難い。だが、たとえそうであるとしても、地方都市の雑誌『キャビネット』をひとつの参照軸に据えることによつて、同時代社会との関わりでウルストンクラフトの著述活動が立体的に明らかにされたとすれば、本稿の試みは決して無駄に終わったことにはなるまい。

事実、二で見たように、「慈善」をめぐって提起された「保護」と「独立」をめぐる問題は、産業革命が進む中、貧民にたいする温情主義的な価値観と、労働者の自助努力を促す自由主義的な価値観の両者を抱き込むようにして、新しい支配体制が形成されつつあった十八世紀末のイギリス社会を照射するものであったと言える。貧民をいかに救済すべきかという問題は、救貧法の見直しとともにこの時

代の重要なトピックであった。人口増加という切迫した問題を目の当たりにして、ゴドウィンに論争を仕掛けたトマス・R・マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) の『人口の原理』(一七九八年) が、ほかならぬジョンソンのもとで出版されていることには、どのような意味が含まれているのであろうか。

そして、ウルストンクラフトを取り巻き、あるいは『キャビネット』の周辺に集った人びとがつくりあげたのは、出版メディアと社交上の討論を軸にした理性的かつ批判的な言論空間であった。非国教徒を中心とするこうしたジェントルマンのサークルは、まさにJ・ハーバースが「市民的公共性」として描いたもののひとつの実例であると言ってよい。⁽⁵⁵⁾ 九五年末の「二法」の成立によって、これまでにない言論弾圧体制が敷かれる中、『キャビネット』は廃刊され、『アナリティカル・レヴュー』も九八年のジョンソンの逮捕とともに求心力を失う。九〇年代後半、政治を語ることが徹底的に危険視されるアンチ・ジャコバンの時代に入ると、この公共性のあり方はどのようなかたちを取っていくのであろうか。

ウルストンクラフトは九七年に世を去ったが、彼女が生

きた社会の中で提起されていた問題や、展開されていた活動は、その後の歴史の中で複雑な足取りを辿っていく。本稿が、言わば謎解きの副産物として、彼女を取り巻いた十八世紀末のイギリス社会の一端を明らかにすることができたとすれば、その目的の大部分は果たされたと言ってよいであろう。彼女の著作と人生は、こうした大きな歴史の文脈の中に位置づけられることで、また新たな輝きの力をもつはずである。

(1) ジョンソンは政府による弾圧を警戒し、出版直前になつて『人間の権利』の版をジョーダンに委ねている。詳しくは Gerald P. Tyson, *Joseph Johnson: A Liberal Publisher*, University of Iowa Press, 1979, pp.122-28. なお、投獄を繰り返した急進派出版者の活動を明らかにしたものと(2) Ralph A. Manogue, "The Plight of James Ridgway, London Bookseller and Publisher, and the Newgate Radicals 1792-1797", *Wordsworth Circle* 27, no.3 (1996): 158-66.

(2) ジョンソンの出版活動について、詳しくは Helen Braithwaite, *Joseph Johnson and the Politics of Publishing*, unpublished Ph.D. the University of Birmingham.

- 1997を参照。なお、Appendix IIIには、彼女が1776〇年から180〇年までに出版した全作品リストがある。
- (3) 十八世紀後半の女性読者および女性作家の増大について、Shurt Curran, 'Women readers, women writers', in Curran (ed.), *Cambridge Companion to British Romanticism*, Cambridge University Press, 1993を参照。
- (4) ただし、ウルスタンクラフトは18〇年代から1840年代のクリンにいたブラリスと交流をもちつた。ブラリスの影響については、Sara Bahar, 'Richard Price and the Moral Foundations of Mary Wollstonecraft's Feminism', *Enlightenment and Dissent* 18 (1999): 1-15.
- (5) ショニン・サートのメンバーについては、Tyson, *op.cit.*, p.121.
- (6) この結句には、多くの非国教徒がスコットランドの大学に進んだことに関わる。
- (7) たゞは、スイン・ハーロー、クリスマ、ケン・M・ウィリアムズ (Helen Maria Williams, 21761-1827) がある。
- (8) *Analytical Review*, vol.1 (1788).
- (9) Jon Mee, "The Doom of Tyrants"; William Blake, Richard "Citizen" Lee, and the Millenarian Public Sphere', in Jackie DiSalvo, G.A. Rosso and Christopher Z. Hobson (eds.), *Blake, Politics, and History*, Garland, 1998.
- (10) Mrs. Herbert Martin (ed.), *Memories of Seventy Years, by one of a Literary Family*, Griffith & Farran, 1883, pp.20-21.
- (11) Braithwaite, *op.cit.*, abstract.
- (12) Taylor, *op.cit.*, pp.46-48. ヘンリー・ドングラ、Derek Roper, *Reviewing before the Edinburgh 1788-1802*, Mathuen, 1978, pp.256-57.
- (13) William Enfield, *A Sermon on the Centennial Commemoration of the Revolution, preached at Norwich, November 5, 1788*, London: J. Johnson, 1788.
- (14) Chandler, *op.cit.*, pp.275-76.
- (15) Jewson, *op.cit.*, ch.5.
- (16) *Ibid.*, p.56.
- (17) X [Marsh], 'Preface', *Cabinet*, vol.1 (1794), pp.ii-iii.
- (18) *Ibid.*, p.v.
- (19) フランネル姉妹については、Chandler, *op.cit.*, pp. 262-63.
- (20) 同時期のウィックと非国教徒の人的結合関係を論じたものとしては、川分圭子「十八―十九世紀転換期のウィック

- グと非国教徒——ホランド・ハウスの人々』『史林』七六卷三号(一九九三年)。また、非国教徒の人脈が形成される上で重要な役割を果たしたウォリントン・アカデミーに ついては、三時眞貴子「ウォリントン・アカデミー (War- rington Academy, 1757-86) の新たな研究に向けて」『化 学史研究』二六号(一九九九年)。
- (21) この時代の評論雑誌が果たした文化的役割については Marilyn Butler, 'Culture's medium: the role of the re- view' in Stuart Curran (ed.), *op. cit.*
- (22) 理性的非国教徒の思想や社交のあり方と急進主義との 関係を論じたものとして、Mark Philip, 'Rational Religi- on and Political Radicalism in the 1790s', *Enlighten- ment and Dissent* 4 (1985): 35-46.
- (23) この時期の行動日記には、Godwin's Diaries, depe. 201-202, Abinger Papers, Bodleian Library, Oxford に おける彼自身の記録を参照。
- (24) この対立は、セルウォールによる直接的な大衆行動の呼 びかけを、ゴドウィンが匿名パンフレットで批判したこと による。九〇年代の急進主義の性格を理解する上で、この 反目は重要な意味をもつ。詳しくは、Gregory Claes, 'In- troduction' to Claes (ed.) *The Politics of English Ja- cobinism: Writings of John Thelwall*, The Pennsylvania University Press, 1995; Mark Philip, *Godwin's Political Justice*, Cornell University Press, 1986, ch.11.
- (25) Corfield, 'The Case of The Cabinet', p.11.
- (26) Mary Wollstonecraft [Mr. Cresswick], *The Female Reader: or Miscellaneous Pieces in Prose and Verse* (Lon- don: J. Johnson, 1789), in *Works*, vol.4, p.55.
- (27) *Monthly Review*, vol.8 (1792). Regina M. Janes, 'On the Reception of Mary Wollstonecraft's *A Vindication of the Rights of Woman*', *Journal of the History of Ideas* 39 (1978), p.295 & 561-610.
- (28) Corfield and Evans, *op. cit.*, p.191.
- (29) Chandler, *op. cit.*, pp.260-61.
- (30) □ [Norgate], 'On the Rights of Woman, contin- ued', *Cabinet*, vol.2 (1795), p.49.
- (31) *Ibid.*, pp.44-45.
- (32) Brathwaite, *op. cit.*, pp.277-78.
- (33) たゞそれ、ゴドウィンの回想を参照。Godwin, *op. cit.*, p.236. (白井訳「七九一八〇頁」)
- (34) 九三年以降の急進派の動きを大逆罪との関係で詳しく 追ったものとして、John Barrell, *Imagining the King's Death: Figurative Treason, Fantasies of Regicide 1793-1796*, Oxford University Press, 2000.

- (35) X [Marsh], 'Preface', *Cabinet*, vol.1 (1794), p.iv.
- (36) Wollstonecraft to Gilbert Imlay, Paris, 19 February 1795, in *Works*, vol.6, p.403.
- (37) Goodwin, *op.cit.*, p.362; Barrrell, *op.cit.*, pp.405-9.
- (38) 松塚俊三「トーマス・ペインの思想と行動——一七九〇年代のイギリス・ラディカルズムと千年王国主義」『西洋史学』一二三号(一九八二年)一四頁。
- (39) 一七九〇年代の急進主義を論じた数ある研究書のうち、この寄付活動に言及したものは、いづれも、
例外として、Nicholas Roe, *Wordsworth and Coleridge: The Radical Years*, Clarendon Press, 1988, pp.92-93.
- (40) 任意団体活動の内容については、詳しくは、長谷川 前掲論文を参照。
- (41) *Morning Chronicle*, London, March 23, 1795.
- (42) *Morning Chronicle*, June 17, 1795.
- (43) この寄付活動の言及が載った字は次の通り。*Morning Chronicle*, March 28, April 4, 21, 29, May 2, 13, 19, June 3, 17.
- (44) ノンメント題名を詳しく研究したFrida Knight, *University Rebel: The Life of William Friend (1757-1841)*, Victor Gollancz, 1971. ウェイトマンは後に彼自身、シモンソンともまた大逆罪で逮捕されることにな
- る。詳しくは、Franklyn K. Prochaska, 'English State Trials in the 1790s: A Case Study', *Journal of British Studies* 13 (1973): 63-82.
- (45) ロマンティックでは、前掲の松塚「一八三五年の都市自治体法と地域政治史」を参照。なお、寄付者リストの中にはその他、ジョン・カートライト、ウェッジウッド、マス・クーパー、ジョーダン、スタンホープ伯爵らの名前がある。
- (46) Goodwin, *op.cit.*, pp.247-48. (白井訳、九九一〇〇頁)
- (47) Wollstonecraft to Archibald Hamilton Rowan, Le Havre, c. April 9, 1795, in Ralph M. Wardle (ed.), *Collected Letters of Mary Wollstonecraft*, Cornell University Press, 1979, p.283.
- (48) クリスマス日記の誤記と情書は、DZの missing persons を参照。
- (49) ナンベは、Wollstonecraft to Hays, London, November 12, 1792; Wollstonecraft to Alderson, London, April 11, 1797, in Wardle, *op.cit.*, pp.219-21, 389-90.
- (50) Ann Batten Cristall, *Poetical Sketches*, London: Johnson, 1795, List of Subscribers.
- (51) *Morning Chronicle*, April 1, 1795.

(52) なお、本文では論じられなかった点として、ここでは筆名の問題に触れておく。前述のように、研究者の大方の見方に従えば、ウルストンクラフトは『アナリティカル・レビュー』の書評記事に「M」「W」「T」という三つのイニシャルを用いていた。一見してわかるように、これらはいずれも彼女の名前の最初か最後の文字である。また、九六年に、彼女が雑誌『マンスリー・マガジン』に随筆を載せた際にも、彼女はとことなく本名を連想させる「W. Q.」という筆名を用いている (*Monthly Magazine*, vol.3 (Apr. 1797), pp.279-82)。確かに「L. R.」は見たところ彼女の名前と無関係のようではあるが、コーフィールドも指摘する通り、彼女の幾分長い名前には「L」と「R」両方のアルファベットが含まれている (Corfield, 'The Case of *The Cabinet*', p.11)。

(53) *Morning Chronicle*, June 22, 1795.

(54) LCの動きについては、詳しくは Mary Thale (ed.), *Selections from the Papers of the London Corresponding Society 1792-1799*, Cambridge University Press, 1983.

(55) ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』細谷貞雄・山田正行訳、未來社、一九九四年(第二版)。理念的な意味をもった「公共圏／公共性」概念を、無原則に歴史研究に持ち込むことには慎重になるべきであるが、非国教徒サークルの特徴の多くがこの概念の性格と重なり合うことは強調されてよい。

二〇〇二年三月二二日受稿
二〇〇二年四月二〇日レフェリーの審査をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)